

Co だより

自殺急増～『指導死』という言葉があるのをご存じですか～

2020年に自殺した小中高校生は479人で、前年より140人増え、過去最多となりました。内訳は小学生14人(前年6人)、中学生136人(同96人)、高校生329人(同237人)でした。特に高校生の女子は前年の67人から倍以上の138人と急増したのです(保護者の希望で病死・事故死でカウントされる場合もあるので実数は更に多いと考えられます)。

「命を絶つ」という悲しい選択に至る原因は決して1つでもなければ、子供世界だけの問題でもありません。いつの時代も子供社会は大人社会の縮図です。私たち大人の世界で起きていることが、子供に伝染しているのです。

仕事でストレスがたまった父親は、母親を家庭で怒鳴り散らす。ストレス社会でイライラした大人たちが、それを子にぶつける。その結果、子供は傷つく。誰からも褒められたことがない。誰からも認められたことがない。そんな子供は、自分を肯定することができません。自分は生きている意味がないと、自ら命を絶とうとするのです。しかし、このような現実、学校内でも起こっています。

「指導死」という言葉をご存じでしょうか。教師の過剰な「指導」が生徒を追い詰め、自殺に至らしめることです。指導死の定義を「『指導死』親の会」の公式ブログより抜粋しました。

1. 不適切な言動や暴力等を用いた「指導」を、教師から受けたり見聞きしたりすることによって、児童生徒が精神的に追い詰められ死に至ること。
2. 妥当性、教育的配慮を欠く中で、教師から独断的、場当たりのな制裁が加えられ、結果として児童生徒が死に至ること。
3. 長時間の身体の拘束や、反省や謝罪、妥当性を欠いたペナルティー等が強要され、その精神的苦痛により児童生徒が死に至ること。
4. 「暴行罪」や「傷害罪」、児童虐待防止法での「虐待」に相当する教師の行為により、児童生徒が死に至ること。

以下のように、群馬県でも「指導死」は起こっています。

- ① 1989年6月11日、群馬県赤堀町で生徒指導の教師に喫煙が知られてしまったことから、男子生徒(中3)が厳しい指導を恐れて自殺。「先生へ」の遺書に「一番きらいできにいない。みんなもそういつている。ころしてとかいつているけどからめないし、先生は口で言えばわかることをどうしてなぐったりするんだろう。そんなことしなくてもいいのに。そのことを考えるだけでいやだ、くそう」と書いて自殺してしまった。
- ② 1998年3月1日、群馬県の男子中学生(中2)が自殺。「もう生きていく自信がない。みんな迷惑掛けてマジごめん」、「ゴメン、オレのせいでみんなヤベーことになっちまって……オレが死ぬ理由は、みんなに悪いから」と書かれた遺書を残していた。2月21日に校内で友人ら8人とタバコを吸い、学校から反省文の提出を求められていた。教師に友人の名を告げたことで責任を感じていたという。
- ③ 2002年3月25日、東京農業大学第二高等学校ラグビー部員K君(高2)が合宿当日に自殺。ラグビー部の練習は長時間で、休みは年間に4～5日だった。1年生の9月頃から何度も過呼吸の発作を起こしていたが、学校は家族に知らせていなかった。自殺当日も発作を起こし、欠席を申し出たが、欠席連絡があったことを知らない監督がマネージャーに連絡を入れさせ、参加を促した。K君は「こいつは策略だ」、「あいつら人間じゃあないから」と言った後、自殺してしまった。後に夏合宿頃から指導陣のプレッシャーが強くなったことや他の選手のミスでK君のせいにする行為(特定の部員に注意が集中する行為を「ハメ」と呼んでいた)があったことが判明した。
- ④ 2007年1月15日、高崎経済大学の女子学生(大2)が川で入水自殺。准教授が8月に課題を出し、12月に提出していない3人に「1月15日までに課題を出さないと即留年」というメールを送った。自殺当日未提出だった2人のうち、この女子学生だけにメールを送った。「レポートを提出できない、ごめんなさい」、「留年するとわかっています、人生もやめます」、「出来損ないの面倒を見させてすみませんでした、お世話になりました。ゼミ楽しかったです」などと、自殺をほのめかす内容のメールを送った後も、しばらく学生を捜さなかった。出された課題について、大学側は「大

学院並みの厳しい課題。ある課題がこなせなかったというだけで即留年というもおかしい」とした。この准教授は、他の学生に対しても人格を否定するような暴言やセクハラ発言などがあつた。この准教授は、2005 年まで勤務していた別の大学でも、停職処分を受け、依願退職していた。

群馬県教育委員会主催の発達障害等に係る研究協議会では、毎年の班別演習・協議で、専門アドバイザーが参加者の先生方にわざと具体性を欠く指示を出し、配慮を欠く対応をするという演習を何度も行ってきました。

体験後、「具体的な指示が大切であることがわかった」、「自己肯定感を上げることが大切」などの感想が出ました。ただ、私が「教師が児童生徒を理解しようとするのが大切」というアドバイスをした後、ある先生が「私にそんな暇はない！」と憤慨なさっていました。

この研修は、数年に渡って行われてきましたが、年を追うごとに児童生徒に寄り添う先生方が多くなり、先生方の共感性も上がっています。多忙であるからといって、我々が最も大切にすべきものは何かを忘れてはならないと思います。憤慨された先生もそれがわかっているのにできないもどかしさを私にぶつけてきたのかも知れません。

私は、発達障害等に係る研究協議会に行く前にどんな配慮を欠く発言をするか毎回考えました。以下はその一部です。

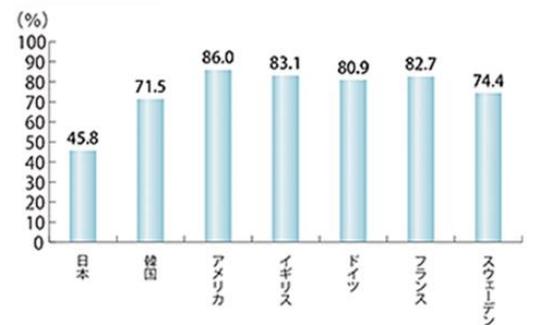
- ・「バカ」、「お前はだめだ」、「やっても無駄だ」、「死んだほうがいい」など人格や能力を否定する言葉
- ・「のろま」、「デブ」、「やせ」など子どもの動作や身体的な面を否定する言葉
- ・「親がしっかりしていない」、「家庭のしつけがなっていない」、「お姉ちゃん(お兄ちゃん)と同じで出来が悪い」など親・兄弟など家族や家庭を否定する言葉
- ・「〇〇と比べて、お前は……」など他の児童生徒と比較する言葉
- ・「へえ、あなたにしては上出来だね」など皮肉やからかいの言葉
- ・「これが、最後だからな」、「もうおまえのことは知らないからな」など脅しの言葉
- ・「それ何回も言ったでしょう」、「何回言ったらわかるの」、「はやくして」、「迷惑なんだよ」など教師側の不満の言葉

私はこの協議会后、毎回強烈な胃痛に悩まされます。脳は主語を理解しません。他人に対して暴言を言ったとしても脳はそれを自分のこととして認めてしまうからです。言われた先生方のダメージは、言わずもがなです。

平成 30 年版「自殺対策白書」の死因順位別にみた年齢階級・性別死亡数・死亡率・構成割合が下表です。若い世代の自殺は深刻な状況にあり、15 歳～39 歳の各年代の死因の第 1 位は「自殺」です。「自殺」と「事故」の比率も日本 17.8:6.9、フランス 8.3:12.7、カナダ 11.3:20.4、米国 13.3:35.1(世界保健機関資料 2016 年)と日本は高い傾向にあります。

2007 年にユニセフが 24 カ国の 15 歳の子どもの対象にした調査で、「自分が孤独である」と感じている子どもは、日本は 29.8%で、2 位のアイスランド 10.3%を大きく引き離しています。また、平成 26 年版子ども・若者白書(図表 1)では、自分自身に満足している 13～29 歳の若者は 45.9%と日本は諸外国と比べて、自己を肯定的に捉えている若者の割合が低いことがわかっています。我々教職員は、以上のような日本の現状を知った上で、自己肯定感を高める指導・支援を行い、児童生徒の命を守っていかなければならないと思います。

図表 1 自分自身に満足している



年齢階級	第 1 位					第 2 位					第 3 位				
	死 因	死亡数	死亡率	割合(%)	死 因	死亡数	死亡率	割合(%)	死 因	死亡数	死亡率	割合(%)			
10～14歳	悪性新生物	95	1.7	21.6	自殺	71	1.3	16.1	不慮の事故	66	1.2	15.0			
15～19歳	自殺	430	7.2	36.9	不慮の事故	306	5.1	26.2	悪性新生物	120	2.0	10.3			
20～24歳	自殺	1,001	17.0	48.1	不慮の事故	373	6.3	17.9	悪性新生物	159	2.7	7.6			
25～29歳	自殺	1,165	19.0	47.0	悪性新生物	315	5.1	12.7	不慮の事故	291	4.7	11.7			
30～34歳	自殺	1,253	17.8	37.4	悪性新生物	641	9.1	19.1	不慮の事故	346	4.9	10.3			
35～39歳	自殺	1,445	18.2	27.8	悪性新生物	1,326	16.7	25.5	心 疾 患	495	6.2	9.5			
40～44歳	悪性新生物	2,675	28.0	28.9	自殺	1,739	18.2	18.8	心 疾 患	1,095	11.5	11.8			
45～49歳	悪性新生物	4,753	52.1	34.1	自殺	1,888	20.7	13.6	心 疾 患	1,819	19.9	13.1			
50～54歳	悪性新生物	7,696	98.9	39.5	心 疾 患	2,476	31.8	12.7	自 殺	1,853	23.8	9.5			
55～59歳	悪性新生物	12,605	168.9	44.5	心 疾 患	3,488	46.7	12.3	脳血管疾患	2,148	28.8	7.6			
60～64歳	悪性新生物	23,343	288.4	48.4	心 疾 患	5,824	71.9	12.1	脳血管疾患	3,324	41.1	6.9			